

研究課題:段階的アプローチによる日本の子どもの現代的健康課題の解明

研究代表者:野井 真吾

子どものからだが「どこかおかしい」「ちょっと気になる」といわれて久しい。このような状況の中、われわれの研究グループでは1978年に実施されたNHKと日本体育大学体育研究所との共同調査以来、子どもの「からだのおかしさ」を解決するための第一段階の作業と位置づけて、保育・教育現場の教師の実感を蒐集することに努めている。また、第二段階の作業では、そのような結果を基に「からだのおかしさ」の実体を身体レベルまで遡ってデルファイ法により問題の所在を導くことに努めている。さらに、第三段階の作業では、「からだのおかしさ」の実体に関するこの推測を確認するために、保育・教育現場に出向いて子どものからだの事実調査にも従事している。しかしながら、子どもの健康課題が急速に変化しているといわれる現在でも5年前と同様の健康課題が存在するのか否かについては、慎重な議論が必要である。そこで本研究では、1978-79年調査、1990年調査、1995年調査、2000年調査、2005年調査、2010年調査に引き続き、同様の調査を実施することにより、最近の子どもの「からだのおかしさ」の状況を明らかにすることを目的とした。対象は、全国3,585施設の保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に勤務する保育士もしくは教諭、養護教諭であった。調査票の配布と回収は、2015年1月に実施され、1,168施設(保育所199所、幼稚園104園、小学校473校、中学校238校、高等学校154校)の保育士、教諭、養護教諭から回答を得ることができた。調査票への回答に際しては、「からだのおかしさ」に関する各事象(乳幼児用:58項目、児童・生徒用:70項目)に対して日頃から子どもを観察している中で抱いている実感を「いる(最近増えている、変わらない、減っている)」「いない」「わからない」の5回答肢から選択回答してもらった。その結果、1990年以降の調査同様、すべての施設・学校段階において、“最近増えている”という「からだのおかしさ」・ワースト5に「アレルギー」と「すぐ“疲れた”という」がランクされた。とりわけ、「アレルギー」については、1990年調査、1995年調査以来、20年ぶりにすべての施設・学校段階のワースト1にランクされた。また、各事象から予想させる問題(実体)と関連するからだの機能の検討においても、これまでの調査同様、「神経系」の発達不全や不調を推測させる結果が導かれた。以上のことから、子どもの神経系に関する事実調査の必要性が確認された。